不思議な力、子どもにはどう見える？階層化社会が生まれる心理的起源

～「超能力＝偉い人」の認識は幼児期から～

【本研究のポイント】

・古今東西、超越的な能力を持つと思われる者が高い社会的地位を有してきた
・この「超越的＝偉い」という現象を成立させる人々の心理基盤は不明であった
・本研究では、超越的な能力と社会的優位性を結びつける傾向が、人間にできること・できないことを区別し始める5～6歳児に見られるかを実験的に検討した
・子どもは超越的な能力を持つ人物に驚きを示し、かつ社会的に優位と判断した
・本研究成果は、人間社会の階層化の解明に繋がると期待される

【研究概要】

国立大学法人東海国立大学機構　名古屋大学大学院情報学研究科の孟　憲巍（もうけんい）准教授らの研究グループは、日本女子大学の石井　辰典　准教授、早稲田大学の杉本 海里 日本学術振興会特別研究員、安田女子大学の中分 遥 講師、京都大学の森口 佑介 准教授、大阪大学の鹿子木 康弘 教授、早稲田大学の 渡邊 克巳 教授との共同研究で、超越的な能力と社会的優位性を結びつける傾向が幼児期に存在することを明らかにしました。

古今東西、霊力などの超越的な能力を持つと思われる者が高い社会的地位を有する現象が普遍的に観察され、人間社会の階層化を解明する糸口とされてきました。しかし、この現象を成り立たせる人々の心理基盤やその出現時期は不明でした。

本研究では、超越的な能力と社会的優位性を結びつける傾向が、人間にできること・できないことを区別し始める5～6歳児に見られるかを実験的に検討しました。その結果、子どもたちは普通の人物と比べて、超越的な能力を持つ人物に対して驚きを示すだけではなく、社会的に優位であると判断することが示されました。この研究成果は、人類史上多くの社会において超越的な能力を持つとされる存在が　権威を持ってきたことや、現代社会においてもこの結び付きが根強く見られることの心理的基盤を理解する上で役立つものと期待されます。また、子どもが感じる「憧れ」と「社会的順位」の法則を見出すことで、より良い教育環境を構築することが期待されます。

本研究成果は、2023 年 7 月 29 日付科学誌「Cognition」に掲載されました。

【研究背景】

「病気を呪文で治せる呪医」や「神霊と交信できるシャーマン」など、超越的な能力を持つとされる者は、歴史上、様々な社会に存在したと言われています。そしてこのような超越的な者は、宗教的権威や集団のリーダーとなるなど、高い社会的地位を持つ傾向が指摘されてきました。この「超越的＝偉い」という現象は、人間の階層化社会の成り立ちを理解する上で重要な糸口であるともされています（Weber, 1947）。では、この「超越的＝偉い」という現象をもたらす個々人の心理的基盤はどのようなもので、どのようにして生まれるものなのでしょうか。

もし社会経験の浅い子どもが超越的な存在を偉いとみなすのであれば、この傾向は人間にもともと備わっているものと考えられます。これまでの研究によると、人は5～6歳から人間の能力（できること・できないこと）をある程度客観的に認識できるようになるとされます（Heiphetz et al., 2016）。例えば、人間は不透明な箱の中を覗かずにその中身を知ることができないこと、人間が呼吸するのは酸素を取り込むためであること、人間は羽を持っていないために飛べないことなどに関して答えられるようになります。このことから、子どもは5～6歳で、人間の能力の限界を超えた「超越的な存在」の概念を理解できると考えられます。すなわち、この年齢は、 子どもが超越的な存在をどのように認識しているかを調べる最低年齢であると言えるでしょう。

【研究内容】

本研究では3つの実験を通して、超越的な能力と高い社会的地位を結びつける 傾向が5～6歳児に存在するかどうかを調べました。まず実験1では、「普通の人」と「超越的な人」が、それぞれ異なる手段で同じ目標を達成するという場面を参加児（41名）に提示しました（図1）。具体的には、「普通の人」は、ヒトの能力範囲から逸脱しない手段を用いましたが（不透明な箱を開けて中身を知る／目的地まで 歩く／チャッカマンで火をつける）、「超越的な人」は、ヒトの能力範囲を超えた手段を使いました（不透明な箱を開けずに中身を知る（心理的能力）／目的地まで飛ぶ（物理的能力）／口から火を出して火をつける（生物的能力））。これらの場面を見たあとに、参加児にどちらの人物にびっくりしたか、どち

らが社会的に優位であると思うかなどを尋ねました(図2)。その結果、ほとんどの参加児は「普通の人」ではなく「超越的な人」に対して驚きを示し、「超越的な人」はより社会的に優位であると判断しました。

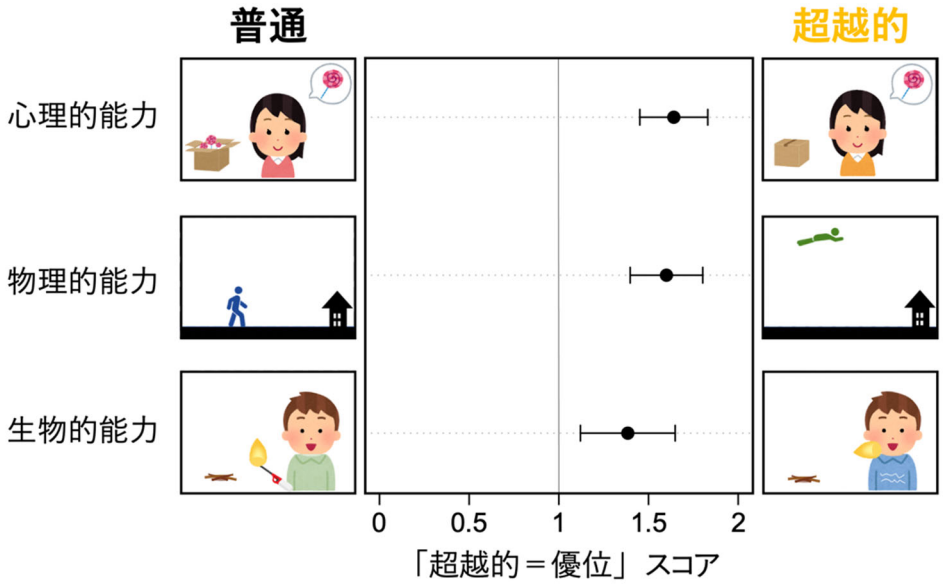

図 1. 実験1の登場人物と結果

なお子どもは「社会的に優位」という言葉の意味を正確に捉えることができない可能性があるため、本研究では図 2 のような「非言語的な課題」を使用しました。

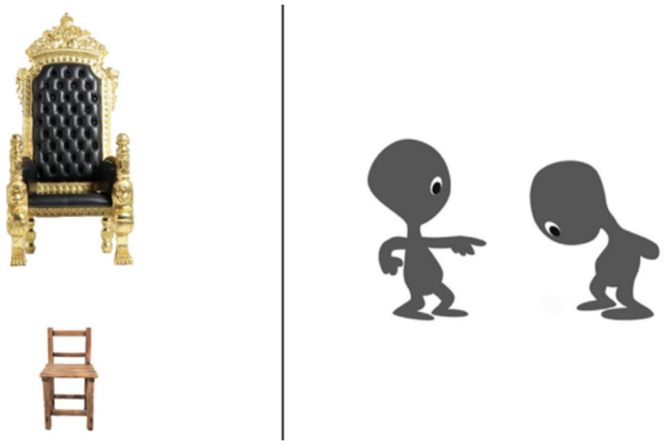

図2. 社会的優位性の課題(左の課題ではそれぞれの椅子に座る人物を選んでもらった: Enright et al., 2017。右の課題ではそれぞれのキャラクターが示す人物を選んでもらった: Charafeddine et al., 2015。)

ただし実験1において子どもが「超越的な人」を社会的に優位と判断した理由は、 その人物が超越的な能力を持っていたからではない可能性がありました。例えば、子どもは

「超越的な人」に対して驚きを見せていましたが、この驚きさえあれば、超越的な能力を持たない人物でも社会的に優位と判断するかもしれません。この可能性を排除するために行われた実験 2 では、参加児(41名)に「普通の人」と「風変わりの人」を見せました(図3)。「風変わりの人」は、ヒトの能力　範囲から逸脱しないものの、一般的ではない手段を用いました(不透明な箱を下から開ける／目的地までハイハイする／靴で火をつける)。その結果、ほとんどの参加児は「普通の人」ではなく「風変わりの人」に対して驚きを示しました。しかし参加児は、「風変わりの人」をより優位な立場にいるとは判断せず、より劣位な立場にいると判断しました。つまり驚きが優位性の判断を生んだわけではありませんでした。

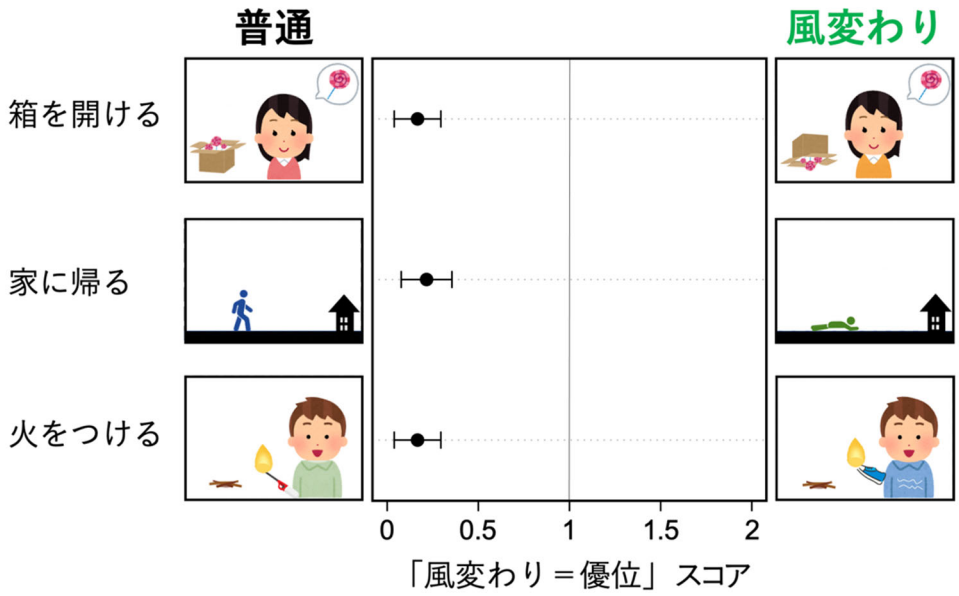

図3. 実験 2 の登場人物と結果

実験1で「超越的な人」が社会的に優位と判断されたことについて、さらに別の理由が関わっている可能性も考えられました。例えば、子どもが超越的な人に対して、そのすべての属性を無差別にポジティブに評価していたのかもしれません。つまり、超越的な能力を持つ人はすごい能力を持つために、その他のあらゆる面においてもポジティブに評価されており(ハロー効果[注 1)]と呼ばれる認知バイアスとして知られています)、社会的優位性の判断もその副産物だったのかもしれません。子どもは超越的な人であれば、その属性を無差別にポジティブに評価するのでしょうか、それとも超越的な能力は社会的優位性の判断に限定して影響を与えるのでしょうか。実験3ではこの点を確かめるために、参加児(53名)に実験 1 と同じ「普通の人」と「超越的な人」を見せた後に、「どちらにびっくりしたか」、「どちらが強いと思ったか」、また「どちらが良いと思うか」という質問を行いました(図4)。その結果、ほとんどの参加児は「普通の人」ではなく「超越的な人」に対して驚きを示し、かつ「強い」と認識するという、実験 1 と同じ結果が得られました。しかし一方で「良いと思うか」と　いう質問では、「超越的な人」より「普通の人」をより良いと評価して

いました。 つまり、子どもは「超越的な人」に対して無差別にポジティブに評価するわけではないことが分かりました。

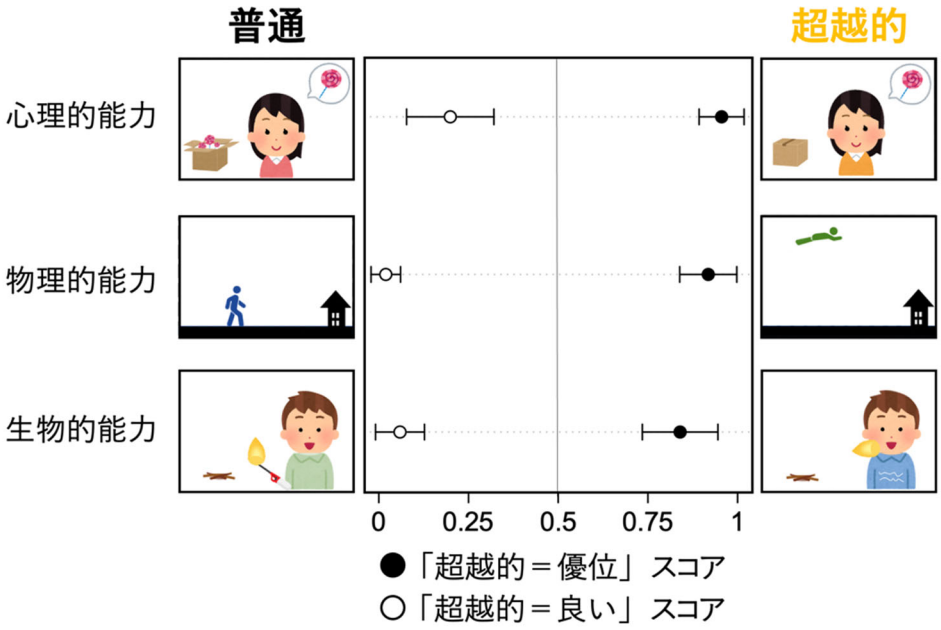

図4. 実験 3 の登場人物と結果

これらの 3 つの実験の結果から、人間の能力の限界を認識し始める 5～6 歳の時期から、人間は超越的な存在に社会的優位性を帰属する傾向をすでに持っていることが示されました。

【成果の意義】

人間を含め、多くの動物は上下関係のある階層化社会に生きています。その階層がどのように成り立っているのか、どのような個体がリーダーになりやすいかという問題は、社会科学において長年議論されてきました。本研究は、「超越的＝優位」との評価バイアスが幼児期ですでに見られることを示し、階層化社会の構築に関する心的基盤の解明に寄与しました。

本研究は日本科学未来館のご協力のもと実施されました。

【用語説明】

注 1）ハロー効果：

人物や物事を評価する際に、ある特徴的な一面に影響され、その他の側面に対しても同じように評価してしまうこと。

【論文情報】

雑誌名：Cognition

論文タイトル：Children attribute higher social status to people who have extraordinary capabilities

著者：Xianwei Meng＊, Tatsunori Ishii, Kairi Sugimoto, Yo Nakawake, Yusuke Moriguchi, Yasuhiro Kanakogi, Katsumi Watanabe
＊名古屋大学

DOI: 10.1016/j.cognition.2023.105576
URL: https://doi.org/10.1016/j.cognition.2023.105576